

滋賀・小谷城跡

- 1 所在地 滋賀県東浅井郡湖北町大字郡上字清水谷
- 2 調査期間 一九九五年(平7)一〇月―一九九六年三月
- 3 発掘機関 湖北町教育委員会
- 4 調査担当者 山崎清和
- 5 遺跡の種類 城跡
- 6 遺跡の年代 一六世紀初期―一六世紀中期
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

小谷城は、長浜平野の北東隅、伊吹山系の一支脈で山田川の侵食によりほぼ独立丘陵を呈している小谷山に位置する。



(長 浜)

小谷山の前面には虎御前山が、西に岡山城跡のある丁野山、東は伊吹山系がせまる自然の要害に囲まれている。麓には越前と美濃を結ぶ北国脇往還道が、その西方三・五kmには北国街道が、南東一七kmには中山道が走る。また、背後の伊吹

山系には越前・美濃への間道があり、小谷城は交通の要所に位置する。

小谷城は、大永年間に京極氏の根本被官であった浅井亮政が築いた。築城の年代は明らかではないが、『宗適話記』『長享年後畿内兵乱記』などから、大永五年(一五二五)には既に築かれていたことが知られる。天文三年(一五三四)には城内清水谷にあった居館で京極氏とその重臣を饗応したことが知られる(『天文三年浅井備前守宿所饗応記』)。浅井亮政が築城した時は小規模であったと考えられ、以後、久政、長政とうけつがれ、天正元年(一五七三)に織田信長によって滅ぼされるまでの約五〇年間、増築をしたと考えられる。

特に長政の時に、かなり整備され今に残る形になったと考えられる。小谷城の遺構は小谷山山頂から尾根及び斜面に広がる山城部分と、小谷山を深く開析した清水谷からなる。また、清水谷前面には城下町が広がる。一九三七年に山城部分が史蹟指定され、一九九五年に清水谷地区が史跡に追加指定された。今回の調査は、小谷城保存修理に伴う発掘調査で、調査地点は字清水谷の入り口部分である。

清水谷は、入り口部分約一〇〇m、奥行き一〇〇〇mの狭小な谷で、「御屋敷」「山城(浅井)屋敷」「遠藤屋敷」「徳昌寺」「知善院」などの地名が残り、また、遺構もみられるところから浅井氏の居館や家臣の屋敷、寺院などの遺構の存在が想定される。一九八三年度に住宅建築に伴う発掘調査で幅約一〇m、深さ約二mの堀を確認し

ていた。

調査の結果、堀の南肩（城下町側）と北国脇往還道沿いに建てられた掘立柱建物を検出した。掘立柱建物の検出面は、多くの焼土を含んでおり、出土遺物から小谷城陥落時の頃の遺構と考えられる。

遺物は、天目茶碗、播鉢、かわらけ、漆器、柿経などで、特に木製品の遺存状態は良好である。柿経は、堀跡の南肩部分よりやや堀に落ちた位置で、数十枚の柿経の板を重ねて一重に結んだ状態で出土した。この周辺は遺構はなく遺物もみられなかった。

8 木簡の积文・内容

柿経は束にして結んであるため、現状では全容は不明で、一枚目の「属」のみ判読することができる。他にこの塊から分離した断片に、「婆」「□羅王」「□」^{〔堅カ〕}などの墨痕が認められる。

今回の調査地の西隣を一九八三年度に調査した際、輪宝を描いた墨書土器が出土している。出土地点の南には、墓と考えられる遺構がみられ、また、調査区の堀を境に北側は「知善院」と呼ばれていることから、当該地が宗教的行為の行なわれた地域であることも考えられる。

（山崎清和）



小谷城跡出土柿経